

目次

銀の墓碑銘<sup>エピタフ</sup>

5

訳者あとがき

355

解説 三門優祐

358

## 主要登場人物

カミラ・ヘイヴン……………イギリス人。女学校の古典語教師。本編の語り手

サイモン・レスター……………イギリス人。古典語教師

マイケル・レスター（ミック）……………サイモンの兄。第二次大戦中にギリシャの山中で死亡した軍人

ステファノス……………ギリシヤ人。羊飼い。大戦中にマイケルを助けていた老人

ニコ……………ギリシヤ人。ステファノスの孫息子

アンゲロス・ドラゴミス……………ギリシヤ人。大戦中にマイケルと協力していたゲリラ

デIMITリオス・ドラゴミス……………ギリシヤ人。アンゲロスの従弟

ダニエル・ラスコー……………フランス人。考古学者の秘書

ナイジェル・バーロウ……………イギリス人。デルフィで活動する画家

銀  
の  
墓<sup>エ</sup>  
碑<sup>ビ</sup>  
銘<sup>フ</sup>

キムへ、懐かしい思い出のために。

ギリシヤ人を好きになれない者は

いかなるものも好きになれない。

レックス・ウオーナー（一九〇五～八六。英国の作家、詩人、古典文学翻訳家）

わたしがギリシヤで過ごした日々と、かのすばらしい国が古代ギリシヤ文学愛好者にもたらす影響が実を結んだ本作、『銀の墓碑銘』（エピタフ）は、わたしのギリシヤとの恋愛であった。

メアリー・スチュアート

## 第一章

女よ

何を待っているのだ？

『エレクトラ』

(ソフォクレス作)

わたしには何も起こらない。

わたしはのろのろと書き綴ると、小さくため息をついて文面を眺め、ボールペンをカフェのテーブルに置き、ハンドバッグの中を引つ掻き回して煙草を探した。

煙を吸い込みながら周囲を見回した。そういえば、エリザベスに宛てた手紙の最後の憂鬱な一文を思うと、ここで起こっていることにはすこぶる満足だった。惜しむらくは、冒険に飢えた心を満たしてもらえない。アテネは旅人にそんな印象を与える。誰も彼もが動き回り、しゃべり、身振り手振りをしてるが——とりわけしゃべっている。アテネで耳に残る音は、嫌になるほど混雑した往來の騒

音でも、絶えず鳴り響く空気ドリルの粉碎音でもなく、いまなお一番安い建材である大理石を削る鑿のの、古代から続く音ですらなく……アテネと言われて思い出すのは、すさまじいおしゃべりの声だ。それはホテルの上階の窓まで、土埃の匂いと車のクラクションに負けじと近づき、スニオン岬のポセイドン神殿から見下ろす海の波のように押し寄せる——アテネ人が言い争い、笑い、しゃべりまくる声は、古代の人々が広場アゴラのにぎわう柱廊で天下国家を論じ合っていた声だ。そのアゴラからさほど離れていない場所であつたは座つていた。

そこは人気があり、込んでいるカフェだつた。わたしは店の奥の、カウンターのそばのテーブルについていた。外壁に沿い、大きなガラスのドアが舗道に向かつてひらかれ、オモニア広場の土埃と騒音がひっきりなしに入ってくる。この広場はアテネの商業中心地と言つていい。間違ひなく、町の喧騒の中心地でもある。車は一日じゅう混雑している通りを徐行したり、先行車を追い越したりした。人ごみ——車道並みに渋滞している——は広い舗道で渦を巻いた。数人ずつ集まつた男は、たいてい黒っぽい街着をぱりつと着こなして、政治論議や商売の話に花を咲かせた。快活な顔つきで、地中海東岸の男が持つ琥珀の、心を鎮める数珠をいじつてゐる。女たちは、着飾つた人もいれば、黒のフレアスカートに黒の被り物という農婦の格好をした人もいて、それぞれ買い物をしてゐる。そこへ、花が山と積まれ、動く花園に見えるロバがのんびり通り過ぎ、飼い主は昼前の暑い通りのさざめきに逆らい、家畜をむなしくどなりつけた。

わたしはコーヒーの入つたカップを脇にどけ、また煙草を吸つて、便箋を手を取つた。そして、これまで書いたぶんを読み返した。

もうほかの手紙が届いている頃でしょうね。ミノス島とデロス島のことを書いた手紙や、二日前にクレタ島で書いた手紙よ。どう書いたらいいかしら。ここがどれほどすばらしい国か、伝えたいことがたくさんあるの。かといって、思いつくまま書き連ねたら、脚を骨折して来られなくなったあなたをますます悲しませてしまう！ ええ、こんな話はもうやめるわ……。いまはオモニア広場——この永久とくわに変わらぬにぎやかな都市でも一、二を争うにぎやかな場所——のカフェにいて、これからどうしようかと頭をひねっていると。クレタ島で乗った船を降りたばかりよ。この世にギリシャの島々より美しい土地があるとは思えない。中でもクレタ島は比類がなく、壮大で、刺激的で、ちょっと不気味でもあった。でも、それは前回の手紙に書いたわね。ところで、デルフィにはまだ行っていないの。人に会うたび、それがひとりでも集団でも、デルフィが旅のクライマックスだと言われたわ。そう願いたいものよ。場所によっては、たとえばエレフシナやアレゴス、おまけにコリントスもちょっと期待外れだったから……。言ってみれば、幽霊たちに心をひらいても、神話も魔法も消え失せている。ただし、デルフィは本当に行く価値があるんですって。だから、最後まで取っておいたの。ただ困ったことに、手持ちのお金が心配になってきたわ。お金のことになると、わたしは頭が回らないみたい。ずっとフリーリップに任せ切りで、確かに彼が正しかった……。

通りかかった客がテーブルの合間を縫ってカウンターに向かい、わたしの椅子にぶつかつた。はつとしてわれに返り、目を上げた。

大勢の客——男ばかり——が、ポリウム満点の昼前の軽食らしきものを目当てに、カウンターに集まってきたようだ。アテネの勤め人は、朝食と昼食の合間をコーヒーより腹持ちがいいもので埋め

ないと、身が持たないと見える。一枚の皿に、どろりとしたドレッシングをかけたロシア風サラダが山盛りになれ、もう一枚においしいそうなミートボールとさや豆のオイル漬けがのり、何枚も並べた小皿には、フライドポテトや小玉ねぎ、魚、ピメントチーズのほか、なじみのない五、六種類の食べ物も盛りだくさんだ。カウンターの上には陶器の瓶が並び、その細い首のそばに、アエギナやサラミスの農家の涼しい納屋から届いたばかりのオリブが見えた。真上の棚に置かれたワインの瓶には、サモスやネメア、キオス、マヴロダフネという名前がついていた。

わたしはほほえみ、あらためて手紙に目を向けた。

……けれど、ここにひとり来てよかったような気がする。誤解しないで。あなたがいなくてよかったわけじゃないわ！ あなたも来られたらよかったのに。わたしはもちろん、あなたのためにも。でも、わかってくれるわね。今回の旅は、わたしが久しぶりにひとりで遠出して——紐を外して、と書きそうになった——ひとりを心から楽しんでるの。これほど楽しめるとは思わなかったくらいねえ、結局フィリップはここに来なかったでしょうね。フィリップがミケーネやクノッソスやデロスの遺跡を歩き回る姿は想像できない。できる？ 彼がわたしを自由に歩き回らせるとも思えない。フィリップなら、イスタンブールかベイルートか、いつそキプロス——要するに、どこであれ物事が何世紀も前ではなく、目の前で起こっている場所——に飛んでいく準備をしておいたはず。そこで何事も起こっていないくても、自分で起こしてしまうの。

楽しかった。そう、いつも楽しかったけれど……この話もやめておくわね、エリザベス。ただ、わたしは間違っていないかった。ちっとも間違っていないかったの。いまとなつては自信があるわ。彼とは

うまくいかなかった。絶対に。今回のひとり旅で、それをますます実感した。後悔していないし、本当の自分になる時間が持てるという安堵感があるだけ。さあ、もう白状したから、この話はおしまい。ありのままの自分でいたら、わたしはできそこないだとしても、それはそれで楽しいし、どうにかこうにかやっていく。でもね……。

便箋をめくり、左手を何気なく伸ばして煙草の灰を落とした。薬指のつけねには、日焼けした肌に白っぽい輪が残っている。そこにフィリップにもらった指輪がはまっていた。エーゲ海の強い陽射しを十日間浴びて、跡は薄れてきた……。六年の長い歳月は未練を残さずかすんで、あとに残ったのは、やはり消えていく数々の楽しい思い出、ひそかな好奇心だった。かのアフリカの伝説で、コフエチユア王に嫁いだ物乞いの娘は、本当に幸せになったのだろうか……。

でもね、この偉大なる奴隷解放には別の一面があるわ。たまに、つまらないと感じてしまうの。もう何年もフィリップの、ほら、大波に流されてきたから！ ちよっと行き詰まった気分。ヘラス（古代ギリシャ人が自国を呼んだ語）の森にひとり置き去りにされた若い女（二十五歳はまだ若い？）に、何か——冒険の匂いがあること——が起こるはずだったのに、何も起こらない。わたしはガイドブックを片手におとなしく神殿を巡り、長い長い夜には、前々から書こうとしている本のために取っているメモをまとめ、この静けさを楽しもうと自分に言い聞かせているところ……。たぶん、これが物事の裏面で、じきに慣れるんじゃないかしら。万一、刺激的な出来事が起こったら、わたしはどんなことをやってのけるだろう——生きるための才覚は身につけたのよ。フィリップの有り余る才能の隣ではお粗末に見

えたけれど。でも、人生は女の手にみずからゆだねないわね？　これからいつものようにホテルの部屋に入り、絶対に書かない本のためにメモを取るつもり。しよせん、わたしには何も起こらないよ。

煙草を置いて、ボールペンを取り直した。手紙を書き上げたほうがいい。さつきと少し感じを変えないと、わたしは結局、あの婚約解消からの「解放」を後悔しているのではないかと、エリザベスが気を回すだろう。

わたしは陽気に書き出した。

おおむね元気にやっているわ。言葉には困らなかつた。たいていの人は片言の英語かフランス語を話せるみたいだし、わたしもギリシャ語を六語くらい覚えたし——それでも厄介な場面は何度かあったの！　お金の管理はうまくできなかった。もう文無しだとは言わないものの、クレタ島に行つてしまつて——いえ、行く価値はあつたけれど、そのせいでデルフィを見逃したら悔いが残りそう。デルフィは見逃せないわ。見逃すなんてありえない。なんとかして行くしかないけれど、一日ツアーでざつと見て回ることになりそう。それが精いっぱい。木曜日にツアーバスが出るから、手を打つしかなさそうね。車を借りる余裕があればいいのに！　ギリシャの神々にいっぺんに祈つたら、どうなるかしら……？

頭上で誰かが咳払いをした。一つの影が便箋の上をどこか申し訳なさそうによぎつた。

わたしは顔を上げた。

ウェイターがわたしを隅のテーブルから追い出そうとしたわけではなかった。浅黒い肌の小男が、継ぎを当てた、くたびれたデニムのズボンと、油じみた青いシャツを身につけ、この国の男が必ず生やしている口髭の陰に照れ笑いを浮かべていた。ズボンは紐で吊っていたが、心許ないのか、汚れた片手でしっかり握っていた。

わたしは男にぎよつとした顔を向けたに違いない。男はますます申し訳なきような顔になったからだ。それでも男は立ち去らず、へたなフランス語で話し出した。

「デルフィに行く車の件です」

わたしは手紙を見下ろして、ばかみたいに繰り返した。「デルフィに行く車？」

「あなたはデルフィに行く車が欲しかった。違いますか？」

カフェのこの片隅にまで日光が差し込んでいた。わたしは目を凝らして男を見た。「ええ、まあ、でも、どうすればいいか——」

「おれが持ってきます」男は汚れた片手——ズボンを押さえていないほう——を太陽がかんかん照りつける入口のほうへ振った。

わたしは困惑して、男の手の動きを目で追った。なるほど一台の車が見える。みすばらしい黒の大型車が舗道の端に停まっていた。

「ちよつと、どういうことか——」

「ほおら！」小男はにやりとして、どこからどう見ても車のキーという物をポケットから取り出し、テーブルの真上でぶらぶらさせた。「これです。生きるか死ぬかの問題、ですよ。ちゃあんとわか

つてます。だから、なるべく急いで——」

わたしはむっとした。「なんの話か、さっぱりわかりません」

男の笑みが消え、おろおろした表情が現れた。「遅れました。わかってます。すいません。マドモアゼルは勘弁してくださいね？ あれは間に合います。あの車——見かけは冴えないけど、いい車、すっごくいい車です。もしマドモアゼルが——」

「あのう」わたしは根気よく説明した。「車は必要ありません。誤解させたならすみませんが、借りられないんです。つまり——」

「でも、マドモアゼルは車が欲しいと言いました」

「それはそうですね。ごめんなさい。ただ、実を言うと——」

「それに、マドモアゼルは生きるか死ぬかの問題だと言いました」

「マドモ——わたしは言っていないわ。あなたがそう言ったんです。せつかくですけど車は必要ありません、ムツシユー。残念です。でも、いりませんから」

「そう言われても、マドモアゼル——」

わたしはすげなく断った。「お金がないんです」

小男の顔は、真つ白な歯ととびきり魅力的な笑みでたちまち明るくなった。「金——かね」見下げ果てたと言わんばかりだ。「金の話はしてません！ だいいち」小男はいとも率直に言った。「もう保証金は払ってあります」

わたしはぼかんとした。「保証金？ 払ってある？」

「そうですね。マドモアゼルが先払いしました」

わたしは安堵のしるしと言えそんな息をついた。これは魔術などではなく、ギリシヤの皮肉屋の神々の干渉でもない。単純な人違いだ。

そこで、きつぱりと言った。「お気の毒に。手違いがあつたようですね。あれはわたしの車じゃありません。そもそも車なんか借りていないので」

ぶらぶらしていたキーが一瞬止まり、それからわたしの目の前で勢いよく揺れた。「あれはマドモアゼルが見た車じゃない。違う、そっちはものすごく悪い車でした。そっちには——なんだっけ？——ひびがあつて、水が出たんです」

「漏水ね。でも——」

「漏水。だから遅くなつたんですけど、ほら、あの車が手に入って、めでたしめでたし。緊急の用事があつて、ムツシユ・サイモンはデルファイですぐに車が必要ですよ。いますぐ発てば、三時間デルファイに着きます。いや、四時間か……」小男はしばらくわたしを見つめ、ざっと計算した……。

「五時間かな？ そうなれば、ムツシユ・サイモンも助かつて、この——」

「生きるか死ぬかの問題も解決する。ええ、そうでしょう。でもね、ムツシユ、やつぱりあなたが何を言っているのかわかりません！ 何かの間違いです。あいにくですけど。車を頼んだのはわたしじゃない。ええと、そのムツシユ・サイモンの恋人が、このカフェで車を待つていたんじゃないでしょうか……？ でも、いまはそれらしき女性が見当たらない……」

小男は早口でしゃべった。度を越した早口なので、あとになって気がついた。彼はわたしが畳みかけるフランス語を断片的にしかり理解せず、意味——自分が聞きたい意味——がわかるフレーズに飛びついていると。車のキーは相変わらず小男の指先で揺れていた。熱いものを落としてしまいたいと言

いたげに。小男が言った。「それぞれ。このカフェ。ひとりで座ってる若い女性。十時半。でも、おれが遅れました。あなた、サイモンの恋人ですよね？」

小男が、物わかりの悪い、明るいい茶色の目でこちらを見た顔は臆病な猿そっくりで、爆発しかけた怒りがすつと消えた。わたしは彼にほほえみかけ、首を振りながら、やつと身につけた六語のギリシヤ語のうちの一語を思い出した。「ネ」と思い切り強い調子で言つてやる。「ネ、ネ、ネ」笑つてシガレットケースを差し出した。「手違いがあつてお気の毒に。さあ、煙草をどうぞ」

煙草はどんな悩みにも効く万能薬に思えた。小男の顔に刻まれた皺が魔法のように消えた。潑刺としたほほえみが浮かんだ。キーがじゃらんと鳴つてわたしの目の前に落ち、ズボンを押さえていない手がシガレットケースに伸びた。「こりやどうも、マドモアゼル。あれはいい車ですよ、マドモアゼル。行つてらっしゃい」

わたしはバッグからマツチを出そうとしていて、顔を上げ、言われたことに初めて気づいた。もう手遅れだった。小男はいなくなつていた。紐を外した犬のように、カフェの出口で人ごみを縫う姿がちらりと見えたが、やがて消え去つた。煙草も三本なくなつていた。ところが、あのキーはテーブルのわたしの目の前にあり、黒い車はやはり戸外で強烈な陽射しを浴びていた。

そのときようやく、キーと車と、さつき小男が影を落としていたテーブルクロスをぼかんと見つめて、わたしははたと気がついた。これ見よがしに外国語を使つてみた代償はずいぶん高くつきそうだ。わたしはげんなりして思い出した。ギリシヤ語の「ネ」は英語の「イエス」という意味なのだ。

もちろん、わたしは小男のあとを追いかけた。けれども、人波が舗道におかまひなく押し寄せては

うねり、どちらを向いても、神々のみすほらしい使いは影も形もなかった。テーブルを担当しているウエイターが心配顔で舗道まで追ってきた。わたしがコーヒードを踏み倒す気配を見せたら、つかまえる気でいたのだろう。ウエイターには取り合わず、四方八方に目を凝らした。でも、援軍を呼んでこれられそうになり、もう小男を探すのはあきらめる潮時だと判断した。隅のテーブルに戻り、キーを手にとって、なおも追いかけてくるウエイターにニコツと笑いかけたが、彼は英語を話さなかった。そこで人ごみをかきわけてカウンターへ向かい、店主を探したところ、こちらは英語を話した。

大勢の男を押しつけ、恐る恐る「パラカロ」と繰り返した。どうやら、これは英語の「プリーズ」に当たる言葉だったらしい。とにもかくにも男たちは道をあげ、わたしはカウンターに身を乗り出した。

「すみません、ご主人——」

店主はフライドポテトの山越しにむしゃくしゃした目を向け、それからわたしを見据えた。

「お嬢さん？」

「キリエ、困っています。たつたいま、妙なことが起こりました。ある男性があその車を——ほら、青いテーブルの向こうの——お客の誰かに運んできたんです。手違いから、わたしが依頼人だと思っ  
ているようで。わたしがあれを運転してデルフィにいる人に渡すと言うんです。でも、わたしは何も  
知らないんです、キリエ。すべて誤解ですし、どうしていいかわかりません！」

店主はトマトのスライスにドレッシングを垂らし、それをカウンターの小さなスツールに座っている大柄な男に押しやると、片手で額を拭った。「代わりに説明しましょうか？ その男はどこにいる  
んです？」

「そこが問題なんです、キリエ。もう行ってしまいました。わたしに車のキーを——これです——渡して姿を消しました。ひよっとして、ここに車を受け取りに来る人を知りませんか？」

「さあ。何も知りませんね」店主は大きなリードルを取り、カウンターの下で何かをかき混ぜ、外に停まった車を見直した。「何も。あの車を誰に渡すんです？」

「ムツシユー、さつきも言いましたが、わたしには誰か——」

「確か、どこかへ運転していくと——デルフィでしたか？　車を渡す相手を教わらなかつたんですか？」

「あら。いいえ。その——ミスター・サイモンという人です」

店主は混ぜたもの——ブイヤベースの一種に見える——を皿によそい、待つているウエイターに渡して、肩をすくめた。「デルフィで？　その名前に聞き覚えはありませんな。うちの客が誰かしら男を見かけたか、車を知ってるかしそうです。ちよっと待つててくださいよ、訊いてきますから」

そして店主はカウンターの男たちにギリシャ語で何やら話しかけ、たちまち活発な、激しいとも言えるやりとりの中心になった。それは四、五分続き、店内の男性客をことごとく巻き込んだが、世間の善意をもつてしても、残念な情報もたらされた。誰もキーを持った小男を見かけず、誰も問題の車を知らず、誰もデルフィでムツシユー・サイモンの名前を聞いたことがなく（この情報を提供した客は、デルフィからほんの数キロ離れたクリーサの住民）、誰もデルフィの人間がアテネで車を借りると思わない。おまけに（最後に）とにかく正気の間人が険しい山地のデルフィへ、自分で運転して行くはずがないと。

「もつとも」クリーサの男が、料理を頬張りながらしゃべっている。「そのサイモンが、デルフィに

泊まつてるイギリス人の旅行者っていう場合もある。それなら全部説明がつく」男は理由を言わず、口いっぱい海老を食べながら、愛想のいい笑顔を見せただけだったが、言いたいことはわかった。

わたしは弁解がましく言った。「おかしな話でしょうが、キリエ、誰かがなんとかしなくちゃいけないような気がするんです。このキーを持ってきた男性の話では——」わたしはためらった。「その、生きるか死ぬかの問題だと」

クリーサの男がくいつと両眉を上げた。それから肩をすくめた。生きるか死ぬかの問題は、アテネでは珍らしくもないのだろう。男はまた感じのいい笑みを浮かべた。「大冒険だね、マドモアゼル」彼は自分の皿に注意を戻した。

一瞬、わたしは男をじつと見た。「ええ」おもむろに答えた。「それはもう」店主に向き直ると、彼は美しい瓶の一つからオリーブをすくおうと四苦八苦していた。書き入れどきと暑さから、店主のアテネ人らしい礼儀と忍耐も尽きてきたようなので、わたしは笑顔を向けるだけにした。「お世話になりました、キリエ。面倒をかけてすみません。ことが本当に急を要するなら、依頼人が手はずどおりに車を取りに来るでしょう」

「ここにキーを置いていきますか？　うちで預かりますよ。そうすれば、お嬢さんは気を揉まないでいい。いやいや、遠慮はいりません」

「もうご迷惑はかけません。実を言うと——」わたしは笑った。「ちよつと気になるので。もう少し待って、その女性が来たら自分でキーを渡します」

さて、気の毒な店主がほつとしたことに、わたしはまた体をよじって人ごみを抜け、自分のテーブルに戻った。コーヒーのお代わりを頼み、新しい煙草に火を点けて、手紙を書き上げるふりをしたも

〔著者〕

メアリー・スチュアート

本名メアリー・フロレンス・エリナー・レインボウ。1916年、イングランド北東部、ダラム州サンダーランド生まれ。38年、ダラム大学英語科を卒業後、ダラム大学で英語や英文学の講師を勤める。55年、メアリー・スチュアート名義の著書“Madam, Will You Talk?”で作家デビューした。2014年死去。

〔訳者〕

木村浩美（きむら・ひろみ）

神奈川県生まれ。英米文学翻訳家。主な訳書に『守銭奴の遺産』や『霧の島のかがり火』（ともに論創社）、『シャイニング・ガール』（早川書房）、『悪魔と悪魔学の事典』（原書房、共訳）など。

ぎん エピタフ  
銀の墓碑銘

——論創海外ミステリ 232

---

2019年4月20日 初版第1刷印刷

2019年4月30日 初版第1刷発行

著者 メアリー・スチュアート

訳者 木村浩美

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル  
TEL:03-3264-5254 FAX:03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266  
WEB: <http://www.ronso.co.jp>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

---

ISBN978-4-8460-1803-0

落丁・乱丁本はお取り替えいたします